

いろいろな病気がある。「コムギなまぐさ黒穂病」は小麦にとつて厄介な病気のひとつだ。長沼ではそうでもなかったが、7年くらい前から3年間ほど南空知で発生した。この病気が発生するとその圃場の小麦がすべて廃棄されたり、数年間小麦の作付けができなくなったりするようだ。北海道農政部のサイトには、生臭い異臭を放ち減収するとある。2016年には30市町村で1000haを超え、21年には99haまで減少したらしい。原因は不明で、当時は登録農薬がなかった。あれやれ、これやれ、連作するな、種子を使え……云々が書かれている。

道庁農政部がわからんのだつたらと、金髪・ブルーアイの情報調べてみた。検索ワードは *Tilletia caries* だ。「マネージメント(圃場管理)では殺菌剤を使い、秋まきの場合は初秋に(早まき?)、春まきは遅れて播く……」とある。パクったのか? 道庁農政部にも同じことが載っていた。面白いことに、本当の病原が *Tilletia controversa* だったと、最近わかったそう。それがわかってもね。この農薬を使えばバッチリ予防できる! ってというのが現状

ではない。このような殺菌剤の使用目的はほとんどが予防で、麦の場合、治療効果がある農薬は存在するのだろうか。

という理由で、麦生産者は病気を発生させないために、登録が取れた殺菌剤を使う。北海道の使用基準では、麦に使用可能なものが30種類以上あり、生育期間内に数回使用できるので、ザツクリ100回農薬散布できることになる。

確認のため普及センターに確認したところ「そうですね」となった。消費者の皆さんご心配なく♡ 100回も散布したら経営が潰れるので、実際には数回の散布(殺菌剤)で十分である。

元来、農薬は消費者のために使用する。これはハッキリ物申したいが、農薬を使いたくないのは消費者のためではない。農薬の削減は生産者の利益になるからだ。いや、生産者が農薬を散布中に「これは消費者の利益にならないからやめた

## 転作と水田は選択可能だとマジで考えてる?

Vol.173



宮井能雅

1953年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

くない」なんて考えるハンカクサイ生産者はいるのであるか。

例えば、私の経営面積120haで10月に、とある除草剤の散布を検討している。ナタネタピラコという憎たらしい雑草は直接農薬散布するしかないのだ。その費用は200万円也。数年放置したら、6月下旬にはナタネ畑のようになって、間違いなく50%は減収するだろう。コツコツと毎

# オレにも 言わせる!

## 北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

年管理しないで同じコンバインを使っていると、注射のまわし打ちのように周りの生産者にも迷惑をかけることになる。

昨年は普通の土壌処理だけでこの農薬散布をしなかったのですが、クサトールFP（ハンドパワー系）で1週間かけて、ナタネタビラコの一個一個にタツチダウンiQを散布した。ラウンドアップよりも泡状になるので、ナタネタビラコの葉に載りやすいのだ。その費用は50万円になった。まさか麦の栽培中に登録のないタツチダウンiQを雑草に一本一本付着させる行為が、農薬取締法違反、なんてことで騒ぐ小農はいるのかな？

## 転作畑の維持費用

大豆を栽培したらツクサやエノキグサはラウンドアップで対応できないし、麦の場合だとこのナタネタビラコはラウンドアップやタツチダウンiQで処理できるが、麦もあるので使えるタイミングが難しい。ところが十勝地方やオホーツク地方の大豆、麦生産者に、この雑草の話をして「何それ？」って言われるのだ。どうもビラコは元水田に由来する雑草の

ようだ。だが、元の水田に戻しても雑草問題が消えるわけではない。頭の良い農水さんだったらこの意味、ご理解いただけますね？

土の構造も十勝地方やオホーツク地方と長沼では違う。この地方は雑草が1年に0.1〜1mm、1万年蓄積されて数メートルの地層ができるが、排水が大変だ。理由の一つに地面全体が同じ沈下率ではない。ここは下がったり、あそこはそうでもなかったり。それに泥炭は一度乾燥すると元の地層の高さに戻らないので、仮に水を入れても水田にはできないのだ。水路や畦畔が整っていても水を入れた瞬間に、ロシアの戦車のようにアメリカ軍が供給した12・7mm機銃もしくは20mm機関砲で撃たれたように、蜂の巣のようになり水が排水に流れてしまう。

その排水の存在も大きいのだ。10年に一度はこの排水の維持管理、つまりコンマ45あたりのバツクホーを借りて行なう排水掃除は、毎年少しづつ作業をするので、その費用は50万円/年。特に今年からは畦畔の維持のために60日間、先ほどのコンマ45のバツクホー2台と4tダンプと派遣社員の経費は200万円になる。こ

の作業を4年間やれば800万円だ。水田に戻しても、その翌年はマトモな麦や大豆にはならない。数字で言えば20〜30%の収量ダウンだ。それが3年続く……。

どこかの官庁の課長さまが話してましたよね、転作と水田の選択ができる、って。マジでそんなこと可能と考えているのかな。破産と倒産か、レゲエミュージシャン（ホームレス）の選択の自由にしか思えないが。

話は変わるが妻は「アメリカ人の子供はボーイスカウト、ガールスカウトを積極的にやるから、大人になってもホームレス生活に拒否感がない」と言う。どこかの誰かは日本人特有の「他人には迷惑をかけない」という美德教育DNAを奪い去ろうとしているのか。

新潟から西では2年3作（麦、大豆、米）で2年分の水活（水田活用交付金）が動く。テレビもねえ、ラジオもねえ、車もそれほど走ってねえで有名な青森・五所川原では、7月15日までに麦の収穫を終え、並行して大豆を7月20日までに播種して、9月に大豆の上から麦を散播して11月下旬に大豆収穫ができる。1年2作でこれも1年分の水活のお金が動く。

北海道の麦と大豆は1年に1回しか収穫できない。中空知、北空知はいまだにコメ栽培が盛んだ。経営面積が小さいからだ。私が住む長沼は南空知だ。なんだと、コメからの転作で面積が大きいのは……標的は私か？ 小作人根性の持ち主は、ある朝起きたら経営面積が勝手に120haになったと思っているのだから残念だが、前頭葉のキャパ不足は否めない。そんな小作人の妬みヒガミを抑えるのが行政の仕事だと思っていた。

十勝の人たちのなかには水活のお金が動くことに「ずるい」と言う人もいる。十勝やオホーツクの畑の生産者にも10万円/haあげたら誰も文句言わないよ。先ほども述べたが、純畑と転作畑では維持費用が年間数十万円/haくらい違う。

1970年から日本政府を信じ、農水省を信じ、麦と大豆の国内食料自給率に貢献し、清教徒が作ったアメリカに惚れ込んで、水田から畑作を進めてきた。あなたたち（政府、土地改良区、行政、国民）を信じていることができないのであれば、誰を信じれば良いのか。外国政府によるプランB、プランCの発動は避けたいところだ。